

8月 巻頭エッセイ

(続)言語活動の潮流を読む: 英語プレゼンテーション

東條 加寿子

大阪女学院大学教員養成センターニューズレター第10号の巻頭エッセイで、『言語活動の潮流を読む: 英語プレゼンテーション』と題して、プレゼンテーションが現代社会の言語活動の潮流に乗っていると書いた。ニューズレター発行日から6日後、ある新聞紙面で「ザ リーダー 第5部 言葉が霧散する国」の連載が始まった<sup>注)</sup>。連載は日本で「言葉の力」が失われている状況について考えている。連載記事はまた、米国ではプレゼンを紹介するテレビ番組が登場し、雑誌では「伝える技術」「言葉の力」といった特集が途切れないと伝えている。やはりプレゼンテーションは今、ホットなテーマなのだ。これらの後押しを得て、ニューズレター巻頭エッセイの続編を書こうと思う。

連載で取り上げられているのは、iPS 細胞の生みの親、京都大学の山中伸弥教授。IT 界のカリスマ、スティーブ・ジョブズ。橋本徹大阪市長、国会議員小泉進次郎。毛沢東から習近平に至る中国指導者。そして人気アイドルグループ「AKB48」と、科学、ビジネス、政治および芸能といった様々な分野で活躍している(活躍した)古今東西の“言葉の名士”である。これらの顔ぶれを眺めれば、私たちは漠然とであるにしろ、「言葉の力」の意味を感じることができよう。

およそ言葉が力を発するには、二つの要素が不可欠であるように思う。一つは言うまでもなく論理性。聴き手には自分の意見を論理的かつ明瞭に伝えなければならない。しかし、日本では「以心伝心」や「阿吽の呼吸」を重視し、「物事をはっきり言わないことを礼儀とする価値観」がある。日本がプレゼン後進国といわれる所以である。

もう一つは情動的要素。言葉を使って人(の心)を動かさなければならない。残念ながら、この観点からも日本はプレゼン後進国といわざるを得ない。連載記事によれば、日本語は、書道文化にみられるように「文字を話し、文字を聞く」という書き言葉の文化であり、歌を歌う際にも日本人は曲より歌詞の言葉に酔うという。一方、西洋文化は声で通じる声中心文化。声から発展した音楽やオペラが盛んであり、演説が人を動かす社会である。なるほど、プレゼンテーションは話し言葉によって人に情報伝える言語活動なのである。プレゼンテーションは論理で人々を説得するとともに、人々の心に共感を呼び起こし人を動かすことができる言語活動なのである。

連載記事によれば、山中教授は、講演会場が関東、関西と違えば話の調子を変え、必ず1回は笑いを取り、聴衆が一般人なら専門用語を一切使われないという。そしてこのプレゼン術は、アメリカ留学中に徹底的に叩き込まれ、その結果、山中教授はプレゼンには絶対的自信を持っておられるようだ。静かな口調の山中教授であればなおさら説得力がある。

論理的に意見を構成すること。話し言葉で情報や意見を伝達すること。聴き手に応じて伝える工夫をすること。聴き手と成果や感動を共有すること。プレゼンテーションは英語活動のエッセンスに満ちている。上述した日本文化論や「風土の違い」を勘案すれば、生徒たちが英語プレゼンテーションに取り組むにあたってはいくつかの言語文化的問題があるかもしれないが、裏を返せば、英語プレゼンテーション力が日本語の言葉の力に転移する可能性も大である。英語の授業で積極的な取り組みを

したいものである。

ここまで考えてみて、教師にとって授業は一つのプレゼンテーションではないかと思えてきた。そして、プレゼンテーションがうまくなりたいと思えてきた。

注)

産経新聞連載「ザ リーダー 第5部 言葉が霧散する国」。2012年7月13日「後進国にくさび」、7月14日「言語力」最も重要な武器」、7月15日「一党独裁 失われた表現力」、7月16日「共感広げる泥臭さ」。